

なぜプラトン『イオン』の対話相手はイオンであるか ——詩作、吟誦という解釈的に行いについて——

風戸美伶

はじめに

プラトン『イオン』⁽¹⁾において、ソクラテスの対話相手は、題名の通り、イオンである。イオンは、主にホメロス叙事詩を吟誦しギリシア中をめぐるのが職業とする「ラプソドス」⁽²⁾のうちの1人である。プラトン対話篇のうち、詩や詩人を扱うものはいくつもあるが、ラプソドスや吟誦という行為を中心とするのは、『イオン』のみである。本対話篇の先行研究における主流の解釈では、その主題が、専門家を象徴するものとしての詩や詩人に関する対話篇と考えられてきた⁽³⁾。より一般的に言うなら、詩人の本質は何かという問題であるとされてきた。しかし、詩と関係があるものの、イオンは詩人ではなく、詩人が作った作品を吟誦するラプソドスである。論者はその点を重視し、本対話篇をラプソドスに関する対話篇と考える。そして、本論文においては、中心の問いとして (a) なぜソクラテスはイオンを対話相手に選んだのか、および (b) なぜプラトンはイオンをソクラテスの対話相手に選んだのかを扱う⁽⁴⁾。そこで、第1章で、詩人とラプソドスの違いを明示し、第2章と第3章で上記の問いに答え、対話篇に込められたプラトンの意図を明確化する。

1. ラプソドスと詩人

本対話篇において、詩人とラプソドスは、明確に区別されている。冒頭から、イオンは、詩人ではなく、ホメロスのラプソドスであるという紹介がなされる (*Ion*. 530a-c)。そして、いわゆるマグネシアの石の比喩の箇所でも、それらは区別されている (*Ion*. 533c-535a)。マグネシアの石の比喩とは、ソクラテスによって語られるものだが、指

なぜプラトン『イオン』の対話相手はイオンであるか

輪が磁石にひきつけられてつながり、首飾りとなるように、詩人やラプソドスがムーサの女神によってひきつけられるというものだ。そして、ムーサの女神→詩人→ラプソドス→聴衆へと「神の分け前 (θεία μοῖρα)」⁽⁵⁾ が、鎖となって伝えられるプロセスが示される (Ion. 533e)。つまり、ムーサにひきつけられた詩人は、次にラプソドスをひきつけ、そしてラプソドスは最終的に聴衆をひきつけ、連鎖は締めくくられる。こうした連鎖の中での、詩人の立場と、ラプソドスの立場は本質的に異なる。それは、聴衆とのつながりである。この比喻において、詩人と聴衆のつながりは、間接的である。とりわけホメロスは、ソクラテスたちが生きている時代には既にないため、ラプソドスの口を借りてはじめて、自身の詩を聴衆に伝えることができる。一方、ラプソドスは、聴衆と直接的つながりがある。さらに、ラプソドスは単に詩を伝えるだけでなく、詩人の考えを解釈し伝える役割がある。これらの点から、ラプソドスは、特権的な立場にいる。逆に言えば、ホメロスという詩人は、ラプソドスを通すことでしか、特権的立場を得られないのである。

このようなラプソドスの特権性を、Capuccino (2011) は、当時のギリシアの「賛美の文化」に当てはめて考えている⁽⁶⁾。詩の中で、英雄は詩人によって賛美され、詩人はラプソドスによって賛美される。詩人を賛美することは、詩人に権威を与える。さらに、賛美の対象(詩人)を理解しているように見えるラプソドス自身にも権威を与えることができる。Capuccino が述べるように、賛美の文化でのラプソドスは、「技術 (τέχνη) かつ知識 (ἐπιστήμη)」⁽⁷⁾ を実際に持っている必要がなく、むしろそれらを持っていると聴衆に認められる必要がある⁽⁸⁾。

実際、本対話篇では、ソクラテスがイオンを「賛美者 (ἐπαινέτης)」⁽⁹⁾ と呼んでいる箇所が2つある。1つ目は、中間部の小結的箇所におけるソクラテスの台詞にある。

τούτου δ' ἐστὶ τὸ αἴτιον, ὃ μ' ἐρωτᾷς, δι' ὅτι σὺ περὶ μὲν Ὀμήρου εὐπορεῖς, περὶ δὲ τῶν ἄλλων οὐ, ὅτι οὐ τέχνη ἀλλὰ θεία μοῖρα Ὀμήρου δεινὸς εἶ ἐπαινέτης.

では、君 [イオン] が私に問うこの原因は、つまり、一方ホメロスについてなら、君はうまくいくが、他方、ほかの詩人についてはそうでないことを通じて、技術

なぜプラトン『イオン』の対話相手はイオンであるか

ではなく、神の分け前でもってホメロスについて君は巧みな賛美者であるということだ (Ion. 536d)。

そして、2つ目は、最終部におけるソクラテスの台詞にある。

Τοῦτο τοίνυν τὸ κάλλιον ὑπάρχει σοι παρ' ἡμῖν, ὦ Ἴων, θεῖον εἶναι καὶ μὴ τεχνικὸν περὶ Ὀμήρου ἐπαινέτην.

それなら、そのより美しいほうを、私たちのそばで君に認めるよ、イオン、ホメロスについて神的であって、技術のない賛美者であるというほうをね (Ion. 542b)。

このように、イオンが技術かつ知識を持たない賛美者であることを、ソクラテスは結論として示す。

イオンの中に賛美者という特徴を見出すことは、本対話篇冒頭から可能である。そこで、ソクラテスは、ラプソドスの技術のうち、詩人の思想を解釈し理解することに対して、羨望を表明する (Ion. 530b-c)。一方、イオンは、その解釈や理解よりも、上手に語ることや飾り立てることに重きを置く (Ion. 530d)。この時点で、ソクラテスの考えるラプソドスの技術にふさわしいことと、イオンの考えるそれが異なっていることがわかる。そのため、イオンは、賛美の対象である詩の内容を吟味することなく、それに隷従する。加えて、詩を吟誦することで、自分自身に技術かつ知識があると彼は思い込んでしまう。

さて、詩人も、神々や英雄を詩の中で賛美していることから、賛美者という特徴は、詩人とラプソドスの共通点であると言える。しかし、論者は、詩人よりもラプソドスの方が、この特徴を強く持つと考える。なぜなら、詩人は、詩作を行うが、その内容について説明したり飾ったりすることはないからだ。一方、ラプソドスは、詩の説明をすることで、より効果的に詩人を権威づけることが可能である。

以上の2つの考察から、詩人とラプソドスの違いが明らかになった。第1に、ラプソドスは、聴衆との直接的関係性を有するという点で、詩人よりも特権的である。第

なぜプラトン『イオン』の対話相手はイオンであるか

2に、詩人とラプソドスには賛美者という共通した性質があるが、ラプソドスはその性質がより強い。

2. ラプソド斯的ソクラテス

詩人とラプソドスの違いを明らかにしたところで、本論文の中心的議論に入りたい。本章では、(a)の問いに答えるために、イオンとソクラテス、それぞれの神との関係性を確認し、その関係性の共通性を導き出す。

はじめに、ラプソドスと神の関係性を確認するために、再び、マグネシアの石の比喻に注目する。そこでは、神の分け前が、神→詩人→ラプソドス→聴衆へと伝えられていく構図が示される。第1章では、ラプソドスが、聴衆と直接的な関係性を持つことを指摘したが、神との関係性においてはどうか。この比喻を確認すると、神→詩人というように、詩人は神と直接的な関係性を持つ。一方で、ラプソドスは、神→詩人→ラプソドスというように、常に詩人を媒介することによって神の分け前を受け取る。つまり、ラプソドスは、神と間接的な関係性を有しているのだ。

次に、ソクラテスと神の関係性を確認するために、プラトン『ソクラテスの弁明』を扱う。というのも、この対話篇では、ソクラテスが神の分け前に対して、どのように向き合っているかがよく描かれているからだ。まさにそこで登場するデルポイの神託が、ソクラテスが受け取っている神の分け前である。この神の分け前こそが、ソクラテスの哲学的対話のきっかけとなる。神託を受け取る端緒は、ソクラテスの友人カイレポンである。彼は、デルポイの神殿に赴き、ソクラテスよりも賢い者がいるかを尋ねる。それに対して、巫女は「ソクラテスより賢い者は誰もいない」という内容の神託を彼に授ける (Ap. 20e-21a)。カイレポンから神託を受け取ったソクラテスは、その内容に困惑する。というのも、ソクラテスは自らのことを最も賢いとは思っていなかったからである。そしてソクラテスは、神が嘘を付くことがないならば、この神託が何を暗示しているのかを考えた。その後、彼は、一般に賢いとされる人を訪ねる。自分より賢い人を見つけ、神託を吟味、論駁しようとしたのである (Ap. 21b-c)。こ

なぜプラトン『イオン』の対話相手はイオンであるか

のようにソクラテスは、神の分け前さえも吟味の対象にしている。

ここで注目したいのは、ソクラテスの困惑である。彼は、しばしば神の分け前を、お告げや夢を通して受け取っている⁽¹⁰⁾。しかし、そうした神から直接与えられる類のものに対して、ソクラテスは吟味するが、困惑しない。デルポイの神託に関しては、神から直接受け取るのではなく、巫女やカイレポンという人物を通して伝えられた。この間接的な関係性が神の分け前の影響を曇らせていると、ソクラテスは考えていたかもしれない⁽¹¹⁾。なぜなら、特にカイレポンは、ソクラテスの弟子であり熱烈な信奉者であるとされるからだ (Ap. 20e-21a)⁽¹²⁾。よってソクラテスは、忠実な弟子が自身を賛美するために、神託を都合よく解釈してしまった可能性を考えていた。それゆえに、ソクラテスは、この神託に懐疑的な態度を表したのだと考えられる。

こうして、ソクラテスの哲学的対話は、自分より賢い人を見つけようとするところから始まる。確かに、ソクラテスは、ラプソドスが詩人の思想の解釈者 (ἐρμηνεύς)⁽¹³⁾ であることをうらやんでいると『イオン』の冒頭で述べている (Ion. 530b-c)。ここでは、詩人の思想 (神の分け前の解釈) の解釈について、イオンは長けているという認識がソクラテスにあったのだと考えられる。彼にとって、神の分け前の吟味というのは、哲学のはじまりであり、重要な点なのだろう。

ここで、今一度マグネシアの石の比喻を『ソクラテスの弁明』における神託に当てはめて考えると、神 (アポロン) → 巫女 → カイレポン → ソクラテスとなる。巫女は、神の分け前を解釈した上で神託をカイレポンに授ける。そうした神託をさらにカイレポンが解釈し、ソクラテスに伝える。そして、解釈に解釈を重ねた神託を、ソクラテスが解釈する。つまり、ソクラテスは神託の、解釈者の解釈者のそのまた解釈者である。

イオンの場合も、ソクラテスと同じように間接的に神の分け前を受け取っている。神 (ムーサ) → 詩人 (ホメロス) → ラプソドスという構造が、『イオン』の中で組まれる。ここでは、イオンというラプソドスが、ホメロスから直接詩を受け継いでいないことに注意したい。イオンは、何人かラプソドスのような詩を伝える人を介して、ホメロス叙事詩を受け継いでいる。実際、ラプソドスは、詩の改変を許されていた。そのため、イオンが受け取ったホメロス叙事詩と呼ばれるものは、ホメロス本人から発せられていたオリジナルからは、マグネシアの石的にも離れたものであったはずだ。よっ

て、ここから、神→詩人→(…)→イオンという実際の構造が見えてくる。イオンもソクラテスも、神の分け前についての解釈者の解釈者をかならず媒体として携えているのだ。つまり、神の分け前のオリジナルの形ではなく、その薄まったものが、ソクラテスやイオンに吹き込まれている。以上のことから、神の分け前を間接的に受け取っているという点に、ソクラテスが自身とイオンの共通性を見出している可能性があることがわかった。

3. ラプソド斯的プラトン、ラプソド斯的読者

さらに視野を広げると、対話篇に内在的な議論を超えて、作者であるプラトン本人が、神との関係性において、自身をラプソドスと共通しているものだと考えていた可能性がある。これが問い (b) に対する回答である。というのも、神託や夢やお告げなどの神の分け前を受け取ったソクラテスが、プラトンなどの弟子たちに語る時、ソクラテスによる神の分け前の解釈を、さらにプラトンが解釈していると考えられるからだ。神→(…)→ソクラテス→プラトンの場合でも、神→ソクラテス→プラトンの場合でも、プラトンは、間接的に神の分け前を受け取っている。この神との間接的な関係性について、プラトンは、ラプソドスと共通性があると言えるだろう。

また、このソクラテスを通した連鎖は、プラトンで終わっていないことを指摘したい。というのも、プラトンも、諸対話篇をソクラテスの生きざまや言動を直接見聞きして、他者に伝わるよう記したからである。我々は、ソクラテスの発言を直接見聞きしてはいない。神→ソクラテス→プラトン→読者という形で、プラトンという解釈者を通して、受け取っている。つまり、ホメロス叙事詩を直接得た人々が、神の分け前の解釈者の解釈者となって後世に伝えるように、プラトンもソクラテスの発言の解釈者、つまり神の分け前の解釈者の解釈者としてそれを後世に伝えている。そうしたプラトンの解釈の結晶であるところのプラトン対話篇を読む我々読者は、マグネシアの石の比喩の中でも、最後の指輪である聴衆に組み込まれるだろう。ただ、対話篇をさらに解釈しようとするならば、読者は、ソクラテスの述べる詩の聴衆と同じ立場には

いない。そうすると、読者は、神の分け前の解釈者の解釈者のそのまた解釈者となるゆえに、ラプソドス的であると言える。

よって、何かしらの制作物を媒介するならば、我々は、神の分け前を解釈としてしか受け取ることができない。詩人やラプソドスは、神がかっていないければ詩作や吟誦をすることができないという前提がある (*Ion*. 534a-535a)。つまり、必ず神の分け前を受容しているので、制作物というのは、解釈にしかなりえないのだ。このように、我々は神の分け前を、解釈の解釈というように、鎖を介して薄められた状態でしか、受け取れない。もしもプラトンが『イオン』という対話篇を執筆するにあたり、何か隠されたメッセージを残しているとしたら、以下のようなことである。つまりプラトンは、自身の対話篇を含むあらゆる制作物は、解釈に過ぎず、それを解釈や吟味することなしに受け取ることの危険性を我々読者に訴えているのだ。それは、ソクラテスが結論において、イオンをラプソドスではなく、あえて賛美者と認める点が象徴的であろう (*Ion*. 542b)。イオンが吟誦できるのは、まさしく神とのつながりがあるからだ。そして、イオンは、神の分け前をホメロスを通じて受け取っている。ホメロスを通じて得た作品は、神の分け前の一解釈にすぎない。それにもかかわらず、イオンはホメロス叙事詩を吟誦できるという点で、技術かつ知識を有していると思込んでしまう。このような態度は、ソクラテスの考えるラプソドスに当てはまらない。よって、ソクラテスは、結論において、イオンをラプソドスとは呼ばないのだろう。我々読者も、ホメロス叙事詩を読むにせよ、プラトン対話篇を読むにせよ、それを一解釈にすぎないものであると理解した上で、そうした制作物に触れなければならない。そうしなければ、イオンのように、技術かつ知識を持っていないにもかかわらず、持っていると思込むという無知の無自覚に陥ってしまう危険性がある。このようなことを気付かせたいために、プラトンは対話篇において、詩人ではなく、イオンその人をソクラテスの対話相手に選んだのかもしれない。

おわりに

本論文では、ラプソドスと詩人の違いを明示した上で、(a) なぜソクラテスはイオンを対話相手に選んだのか、(b) なぜプラトンはイオンをソクラテスの対話相手に選んだのかという問いに回答した。ここで明らかになったのは、以下のことである。

はじめに、ラプソドスと詩人の違いについて明らかにした。第1に、ラプソドスが、聴衆と直接的なかわりを持つという特権的立場にいることを挙げた。第2に、ラプソドスの方が詩人よりも賛美者という性質を強く持つことを挙げた。ラプソドスと詩人は多くの点で共通しているが、ソクラテスは以上の点から、両者を区別して認識していたと考えられる。

次に、本論文の中心的議論を扱った。問い(a)に対しては、ソクラテスが自身とラプソドスに共通性があると認識していた可能性があることを指摘した。そこで、神の分け前の解釈の解釈に、イオンが長けている可能性があるため、ソクラテスはイオンを対話相手にしたと考えられる。そして、問い(b)に対しては、プラトンが、作者である自分にも、読者にもラプソド斯的性質を認めていたからだを指摘した。ソクラテスを通して、神の分け前を受け取るプラトンは、まさしくラプソド斯的である。

さらに、プラトン対話篇を読む我々読者もまたラプソド斯的である。我々は、プラトン対話篇を読み、しばしばその美しさや臨場感に心を震わせる。だが、あくまで、どのような制作物においてもそれに触れるとき、一解釈を受け取っているにすぎない。こうしたことを理解していないと、読者もイオンのように、無知の無自覚に陥ってしまう。その危険性を、プラトンは示していると考えられた。そして、こうしてプラトン対話篇について解釈を試みている論者もまた、ラプソド斯的であると言えよう。本論文もまた、プラトン『イオン』の一解釈にすぎないのだ⁽¹⁴⁾。

註

(1) 『イオン』のテキストについては、Burnet, J., *Platonis Opera*, vol. 3, Oxford Classical Texts, Oxford University Press, 1903 を底本とした。また、訳出にあたっては、以下の翻訳、注釈を参考

なぜプラトン『イオン』の対話相手はイオンであるか

にした。Allen, R. E., *Plato's Ion; Hippias minor; Laches; Protagoras*, Yale University Press, 1996、Miller, A. M., *Plato's Ion*, Bryn Mawr Greek Commentaries, 1981、Murray, P., *Plato on Poetry: Ion; Republic 376e–398b9; Republic 595–608b10*, Cambridge University Press, 1996、Rijksbaron, A., *Plato. Ion.: or on the Iliad.*, Brill, 2007、プラトン「イオン」『プラトン全集 10』（森進一訳）岩波書店、1975年。

(2) ラプソドス (ῥαψωδός) は、ホメロスをはじめとした詩人の叙事詩を吟誦し、それに関して解説する吟誦詩人であり、役者であり、教育者であったとされる。「吟誦詩人」と訳されることが多いが、本論文では、そうしたさまざまな役割を持つ点に注目し「ラプソドス」と音写する。

(3) cf. Grube, G., *Plato's Thought*, Methuen, 1935、Taylor, A. E., *Plato the Man and His Work*, Methuen, 1948、Dorter, K., “The Ion: Plato's Characterization of Art,” *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, vol. 32, no. 1, Oxford University Press, 1973, pp. 65-78、Janaway, C., “Craft and Fineness in Plato's Ion,” *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, vol. 10, 1992, pp. 1-23、Murray, P., *Plato on Poetry: Ion; Republic 376e–398b9; Republic 595–608b10*, Cambridge University Press, 1996。これら先行研究は主に、『イオン』を『国家』におけるいわゆる詩人追放論と関連づけてきた。つまり、ラプソドスを通して詩人を批判していると解釈されてきた。たしかに、本対話篇はラプソドスだけでなく、詩人も批判の中心に据えられる。しかし、もし詩人に対する論駁を目的とするならば、対話相手は、ラプソドスではなく、詩人がふさわしいように思われる。読解する際は、議論の中心が誰にあるのかということを整理し、両者の共通性だけでなくその違いにも注意する必要があるだろう。

(4) 「なぜプラトン『イオン』の対話相手は、詩人ではなく、ラプソドスのイオンであるか」という問いを、2つに細分化した。ソクラテスは、あくまで描かれた登場人物であり、対話篇内でイオンを対話相手に選ぶ動機がある。その一方、プラトンは、『イオン』の作者であり、その作者として、ソクラテスの対話相手にイオンを選ぶ動機がある。この細分化は、ソクラテスとプラトンを区別して考えるという点で重要である。

(5) 神の分け前 (θεία μοῖρα) は、プラトンの真作とされる対話篇のうち、12回登場しており、そのうちの5回は『イオン』で登場している (*Ion*. 534c, 535a, 536c, 536d, 542a)。

(6) cf. Capuccino, C., “Plato's *Ion* and the ethics of praise,” *Plato and the Poets*, Destrée, P. & Herrmann, F. G., ed., Brill, 2011, pp. 78-79.

(7) 技術 (τέχνη) と知識 (ἐπιστήμη) は、本対話篇でしばしば登場する語であり、とりわけ技術に関する語は、63回用いられている。ソクラテスによると、ラプソドスの技術には、身体を飾ること以外に、ホメロスと交際し、詩やその思想を完全に学び、理解することが必要であるとされる (*Ion*. 530b-c)。

(8) 本対話篇を読み解く中で、技術かつ知識を実際に持っていることと、持っているようにみ

えることは明確に区別しておかなければならない。ソクラテスがイオンに対し、前者を求める一方で、イオンは後者を求めた。というのも、イオンは技術かつ知識を有していなくても、賛美という行為を通せば、権威ある立場だと聴衆が認め、すぐれた人だと認識されうるからだ。ソクラテスからすると、技術かつ知識を持っていないラプソドスは、たとえ持っているようでも理想的なラプソドスではない。

(9) この2度用いられる ἐπαινέτης は、「ラプソドス」と訳す場合が多くみられるが、ここでは、ソクラテスが ῥαψωδός ではなく、ἐπαινέτης を用いている点に注目し、「賛美者」という訳をつけた。このことは、もはやイオンは、ソクラテスにとって、ラプソドスですらないという評価を受けたと考えられる。本対話篇において、テクネー・アナロジー（技術知との類比によるソクラテスの論法）が2度用いられるが、どちらにおいても、ソクラテスは「イオンは、神の分け前を受け取っている ἐπαινέτης である」という内容の結論を導く。1度目の小結後、イオンは、自分の吟誦を聴けば、ソクラテスが「そのように」思わなくなると主張する (Ion. 536d)。一見ここでのイオンの主張は奇妙なものだ。神がかっていると自認しているにもかかわらず、ソクラテスの評価を退けようとするからだ。先行研究では、この奇妙さゆえに、ソクラテスは、イオンが議論を理解していないとし、再び同じ手法で対話を循環させるしかなかったとされる。だが論者は、ソクラテスがイオンを「賛美者」と評価したことに対して、イオンが反論を試みたと考える。イオンはここで、ラプソドスという彼の自己同一性が揺るがされたのではないか。そして、ソクラテス自身もその意図をくみ取り、2度目の議論を始める。2度目は1度目と異なり、より具体的にイオンの専門分野とされるホメロス作品から議論を展開する。よって論者は先行研究と異なり、一連の議論が循環や繰り返しなどではないとする。

(10) 神の分け前を受け取るソクラテスは、『パイドン』においても登場する。そこでは、神の分け前をお告げという形で受け取る。死刑判決後、彼は獄中で、「ムーシケー (μουσική) をなし、仕事とせよ」(Phd. 60e) という夢のお告げを受け取る。ここで彼は、ムーシケーが哲学であると解釈しながらも詩作を試みる (Phd. 61a-b)。ソクラテスは、神の分け前を直接受け取ったとしても、それを人間が完全に理解できないと考え、吟味し続けたのだろう。神の分け前の吟味こそが、彼の哲学のはじまりでありおわりである。

(11) 神託の過程については、『ティマイオス』でも言及される (Tim. 71e-72b)。そこでは、デルポイにおける巫女を含む預言者たちには、神的預言者と技術的預言者がいるとされる。前者が直接神の分け前である神託を受け取り、それを後者が分析する。神→神的預言者→技術的預言者→神託を求める人という構図は、『イオン』で示される構図と共通する。また、この過程についての話者は、初期対話篇の『イオン』ではソクラテスであり、後期対話篇の『ティマイオス』ではティマイオスである。この話者の違いは、プラトンが、初期から後期に至るまで、一貫した問題意識を持つ

て執筆していることになるだろう (cf. Trivigno, F. V., “Technē, Inspiration and Comedy in Plato's *Ion*,” *Apeiron*, vol. 45, Walter de Gruyter, 2012, pp. 300-302)。

(12) カイレポンは、「取り掛かったものにはどこまでも夢中になる人」(Ap. 21a) とソクラテスに称される。さらに、アリストパネスの『雲』では登場人物として、また『鳥』1296, 1562-1564 や『蜂』1408, 1412-1414 で、ソクラテスへの忠実さを嘲笑される。

(13) これまで ἐρμηνεύς という語は、単に「仲介者」や「伝達者」とされたり、対話篇中で「解釈者」から「仲介者」へと変わるとされたりしてきた。しかし、ラプソドスは、神の分け前を聴衆に伝えるが、そのまま吟誦することができない。そのため、理想的でないラプソドスの吟誦にさえ、必ず解釈的行為が含まれる。ここからラプソドスは、「仲介者」「伝達者」「解釈者」のすべての役割を持つことがわかる。そこですべてを包括するような「通訳者」や「翻訳者」とするのがふさわしいと思われる。しかし、本論文はあくまでラプソドスの持つ、詩の解釈という役割を強くとりたいため「解釈者」と訳した (cf. Gonzalez, F. J., “The Hermeneutics of Madness: Poet And Philosopher In Plato's *Ion* And *Phaedrus*,” *Plato and the Poets*, Destree, P. & Herrmann, F. G., ed., Brill, 2011, pp. 92-110、三浦太一「狂気の伝達 ——プラトン『イオン』篇における詩人とラプソドス、そして聴衆——」『アリーナ』(中部大学) 2019 年、22 号、277-290 頁、宮崎文典「賛美の言論と哲学の言論」『フィロソフィア』(早稲田大学哲学会) 2016 年、104 号、137-152 頁)。

(14) 本註にて、発表の際にいただいたご質問への応答を試みる。本論文においては、ホメロスのような詩人が制作した詩と、プラトンが制作した哲学的対話篇の 2 つを同じ制作物として扱った。しかし、詩というのは娯楽である一方で、プラトン対話篇のような哲学的文章というのは知的なものである。そのため、これらを同じ制作物として扱うのは適切なのかという問いをいただいた。論者は、一貫して両者は制作物であるという点において、分離して考えることはしない。というのも、神の分け前の点において、知的な制作物とそうでないものの区別はなされないからである。詩を味わうということは、哲学の文章を読む際と同様に、その受け取ったものを解釈していることと変わらない。

